

SEASノシャクドコウセイニカンスルイチコウサツ : YGセイカクケンサオテガカリトシテ

亀石, 圭志
九州大学教育学部

山田, 裕章
九州大学健康科学センター

<https://doi.org/10.15017/450>

出版情報 : 健康科学. 8, pp.1-8, 1986-03. Institute of Health Science, Kyushu University
バージョン :
権利関係 :



SEAS の尺度構成に関する一考察

— YG 性格検査を手がかりとして —

亀石圭志* 山田裕章**

A Study on Scale Construction of the SEAS: Compared with Yatabe-Guilford Personality Inventory

Keishi KAMEISI* and Hiroaki YAMADA**

Summary

Murayama et al. (1983) reported the SEAS, a questionnaire which measures the extent of Self-Actualization. In this report, we tried to study the 10 categories of SEAS, by comparing with Yatabe-Guilford Personality Inventory (YG).

Forty-one students of a professional school accomplished these two tests. The correlations among the categories of SEAS and the factors of YG were calculated. And Cluster Analysis was applied to those data.

Main results were as follows: (1) Half the factors of YG (D, C, I, N, O, Co) were significantly correlated with each other, and made one cluster in Cluster Analysis. Thus we could not clearly interpret the correlations among these 6 factors and SEAS's categories. (2) Three categories of SEAS, 'Achievement Orientedness', 'Genuineness', and 'Separatedness', were not correlated with any factors of YG. (3) 'Way of Positive Life' and 'Acceptance of Weakness' were found to be correlated with only the 6 factors described above. (4) 'Self-Acceptance' and 'Obsessiveness' were correlated with General activity and Social extraversion of YG, and these categories also correlated with the 6 factors. (5) 'Self Assertion' made a cluster with the three factors of YG, Luck of agreeableness, Ascendance and Social extraversion. 'Integration of Bipolarity' correlated with Rhythymia of YG, also 'Self-Directedness' with General activity.

I 問 題

Maslow²⁾ は、精神分析や行動主義とは異なる「第3勢力」を提唱した。この第3勢力、つまり人間学的心理学は、人間を、目的と価値と選択権を持ち、自己決定の権利と能力を備えた存在だと考えた。人間は、その自由意志によって、自らが持つ成長と幸福へのポテンシャルを最大限に発揮することができる。そして、人間の動機の中で最高のものは自己実現への動因である¹⁾。

その後、「自己実現」をめぐる議論は、必ずしも Maslow らの理論的背景をふまえることなく行なわれた。そして、この自己実現概念は広がりを持ち、より多義的な意味を持つようになった。「自己実現」は、個人の精神的な成長や統合を示す、より一般的な用語となったのである。

Shostrom³⁾ は、個人の自己実現の程度を測定する質問紙、Personal Orientation Inventory (POI) を提出した。Knapp⁴⁾ によれば、「自己実現という概念が新奇で複雑だったために、その構造や力動的な原理

* Faculty of Education, Kyushu University, Fukuoka 812, Japan.

** Institute of Health Science, Kyushu University 11. Kasuga 816, Japan.

については、ほとんど何もわかっていなかった」が、POIの出現によって、「どのような条件の下で、また、どのような特性を持つ機関や治療が自己実現を最大化することができるのか、といった問題に対して、実証的にアプローチすることが可能となった」のである。

POIに関する、またそれをを用いた多くの研究が行なわれた。それらは、実験心理学、カウンセリング、エンカウンター・グループ、教育心理学、あるいは文化間比較など広範囲に渡っている。

さて、わが国においても、自己実現を測定する質問紙を作成しようとする試みが、幾つかなされてきた。その中で、村山ら^{9)~7)}による一連の研究によって、「SEAS」と名付けられた60項目からなる質問紙が作られた。そして、村山ら^{9)~5)}は、その内部構造に関する検討を行っている。本研究は、YG性格検査との比較を通して、SEASの各カテゴリーが持つ特性を統計的な立場から検討していこうとするものである。

II 対 象

医療系専門学校学生、男子31名、女子10名、計40名を被験者とした。年齢は18歳~43歳(平均23.3歳)。調査は授業時間に一斉に行なった。YG実施の1週間後にSEASを実施した。データの分析にあたり、YGで1名、SEASで1名にデータの欠損があり、それらを処理から除外した。したがって、結果の報告における被験者数は40ないし39名となっている。

III 結 果

1. 母集団の特性

SEASのデータから、村山ら^{9)~7)}、山田ら¹⁰⁾と同様に、各カテゴリー別の得点を求めた。YGは、マニュアル通り各因子別の素得点を求め、その得点を以下の計算に用いた。YGの「系統値」および「類型水準(判定)」は処理の対象とはしなかった。

Table 1は、SEASの各カテゴリー別得点の平均値と標準偏差を表している。村山ら⁹⁾の高校生、大学生および看護学生のデータ(全体をプールしたもの)と比較するために、各カテゴリーについてt検定を行った。その結果、3個のカテゴリーで有意差(5%水準)が見られた。すなわち、村山ら⁹⁾の用いた母集団に比べて、本研究で調査対象とした集団は、(1)カテゴリー(以下CATと略称する)2の「達成志向」

Table 1 SEAS各カテゴリー得点

	平均 (分散)	カテゴリー・ラベル
1	6.30 (3.06)	現在の自己の肯定
2	2.83 (2.09)	達成志向
3	11.60 (2.55)	積極的に生きる
4	5.35 (2.61)	自己主張
5	8.45 (2.48)	卒直な自己表現
6	7.05 (2.26)	両極性の総合
7	5.40 (2.00)	独立性
8	5.05 (2.96)	強 迫
9	5.58 (2.84)	自己志向
10	7.83 (3.64)	弱点の受容

N=40

Table 2 YG各下位尺度得点

	平均 (分散)	尺度名
1	8.73 (6.27)	D 抑うつ性
2	8.68 (5.04)	C 気分の変化
3	7.15 (5.95)	I 劣等感
4	8.35 (6.92)	N 神経質
5	6.93 (3.87)	O 主観的
6	7.50 (4.02)	Co 非協調的
7	11.13 (4.08)	Ag 攻撃的
8	12.38 (5.08)	G 活動的
9	11.08 (4.91)	R のんき
10	9.20 (4.22)	T 思考的外向
11	10.35 (4.88)	A 支配性
12	14.30 (4.47)	S 社会的外向

N=40

得点がより低い、(2) CAT 4「自己主張」得点、(3) CAT 8「強迫」得点がより高い。これらは、本研究の対象を特徴づける一つの特性と考えることができるだろう。

Table 2にYGの各因子得点の平均と標準偏差を示す。この平均値をYGのプロファイル上にプロットするとほとんどが、標準得点3に位置し、特徴らしいものを示さない。

Table 3にSEAS各カテゴリー間の相関係数を示す。相関係数の有意性検定の結果、1%水準で有意なもの2個見出された*。

Table 4は、YGの各因子間の相関係数を示す。その結果、因子間の相関がかなり高いことが見出された。情緒安定性を示す4因子(D, C, I, N)は互い

* Table 3~5において、相関係数はピアソンの積率相関係数を示した。各Tableの相関係数値は小数点を省略している。

Table 3 SEAS のカテゴリ間の相関係数

	CAT1	CAT2	CAT3	CAT4	CAT5	CAT6	CAT7	CAT8	CAT9	CAT10
CAT1		161	055	308	313	057	156	264	340	313
CAT2			-375*	-290	095	-036	-137	072	-199	148
CAT3				180	-056	-094	359	166	001	368*
CAT4					201	071	253	-205	187	190
CAT5						037	-022	032	228	-059
CAT6							166	126	251	213
CAT7								278	-005	140
CAT8									024	293
CAT9										112
CAT10										

*: p<.05 **: p<.01 N=40

Table 4 YG の因子間の相関係数

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
	D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
1 D		752**	645**	667**	728**	466*	200	-319	103	-402*	003	-087
2 C			591**	567**	605**	346	348	-142	414*	-350	069	016
3 I				580**	569**	239	-126	-331	229	-120	-344	-274
4 N					520**	428*	132	-216	-019	-477	-149	-143
5 O						486**	212	-279	380*	-299	016	027
6 Co							284	-029	051	-306	117	-048
7 Ag								223	414*	-313	571**	526**
8 G									088	-189	334	224
9 R										211	229	362
10 T											-233	-128
11 A												694**
12 S												

*: p<.05 **: p<.01 N=40

Table 5 SEAS のカテゴリと YG の因子間の相関係数

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
	D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
CAT1	-619**	-511**	-657**	-530**	-485**	-185	219	451*	014	186	147	301
CAT2	094	016	-000	186	118	148	-109	-162	-131	004	-273	-287
CAT3	-414*	-439*	-028	-275	-418*	-643**	-330	218	-061	271	-100	007
CAT4	-246	-092	-319	-123	-268	-216	416*	418*	127	-165	450*	576**
CAT5	-192	-023	-189	-241	-206	082	185	237	238	040	154	165
CAT6	106	318	022	-227	213	022	328	-065	497**	082	303	402*
CAT7	-127	-109	-110	-273	-301	-317	135	248	-167	-150	041	176
CAT8	-317	-223	-105	-381*	-279	-344	-191	-232	006	375*	-292	-045
CAT9	-282	062	-279	-178	-132	077	365	526**	224	-021	443*	368
CAT10	-499**	-331	-250	-528**	-395*	-407*	-129	135	-070	228	-127	-001

*: p<.05 **: p<.01 N=39

に相関している。また、他の相関については、必ずしも規則性が明確ではない。SEASとの関連を検討するにあたって、YG自体の持つこの因子間の相関の高さが留意されなくてはならないだろう。

2. SEASとYG——相関係数による分析

SEASの各カテゴリー得点とYGの因子得点の相関をTable 5に示す。これをもとに、SEASの各カテゴリーの意味を検討することができるだろう。

CAT 1:「現在の自己の肯定」は、YGの情緒安定を示す因子(D, C, I, N)のそれぞれと高く相関している。このYGの4因子は各々相関しているの、不明確な部分は残るが、CAT 1は情緒の安定性を反映するカテゴリーと考えていいだろう。また、CAT 1は、YGのG(一般活動性)と正の相関を示している。

CAT 2:「達成志向」は、YGの因子とは高い相関を示さない。YGがカバーする内容の中には含まれてはいない。

CAT 3:「積極的に生きる」は、YGの4つの因子(D, C, O, Co)と有意な相関を示している。このことを文章で表現すると、より「積極的に生きる」人は、抑うつ性や気分の変化が小さく、客観的で協調的だ、ということになる。

CAT 4:「自己主張」は、YGの活動性(Ag, G)、社会性(A, S)とそれぞれ正の相関を持っている。

CAT 5:「卒直な自己表現」は、YGの中に特に関係のあると思われる因子がない。CAT 2と同様、YGがカバーしない内容を測定していると考えていいだろう。

CAT 6:「両極性の統合」は、YGのR(のんき)およびS(社会的外向)と正の相関を持っている。

CAT 7:「独立性」は、YGの因子の中に特に関連するものが見出せない。

CAT 8:「強迫」は、N(神経質)とは負の、T(思考的外向)とは正の相関を示している。ただし、YGのTとNは、もともと相関が高い。

CAT 9:「自己志向」は、G(一般活動性)とA(支配性)と正に相関している。このCAT 9は、単に「自己」のみを志向するのではなく、他者を支配しようとする側面をも反映しているのかもしれない。

CAT 10:「弱点の受容」は、YGのD, N, O, Co因子と負に相関している。つまり、弱点を受容しているほど、抑うつ性が小さく、神経質の程度が小さ

く、より客観的であり、より協調的となる。

以上10個のカテゴリーのうち、YGの因子と特に関係の認められなかったものが3個、何らかの関連が見出されたのが残り7個である。ただし、どの程度の相関係数の値をもって関係ありとするかは、多分に恣意的であり、注意深い議論が必要だと思われる。

3. クラスタ分析

前節で、SEASとYGの関連性を検討した。その結果は、かなり入り組んだ関係を示していた。その理由の1つに、YGの各因子間の相互依存性の大きさが挙げられるだろう。つまり、YGとSEASの間の相関係数が、いわば「見かけ」の値となり、相関係数が両者の関係を正確に反映していない可能性があると考えられる。

YGを基準測度としてSEASを検討する場合、YG自体の特性が影響を及ぼすのは当然である。そこで、統計的手法によって、YGの内部要因をなるべく排除し、SEASとYGの関係を探る試みとして、クラスタ分析を行った。本節では、その結果を記述する。

Fig. 1は、SEASの全カテゴリー、YGの全因子を変数としたクラスタ分析の結果を示している。計算法は、SPSS(三宅³⁾)のクラスタ分析(Rモード)の標準値によっている。

Fig. 1を検討しよう。YGの因子間相関で高い相互依存性を示していた6因子が、Fig. 1の最も下に1つのクラスタを形成している。これは、YGのプロフィルの上半分を占める6個の因子(D, C, I, N, O, Co)が、このクラスタ分析によると、SEASの各カテゴリーのいずれとも類似性の低いことを示している。

次に、類似度係数70前後を基準として、SEASカテゴリーとYGの因子間の関係を、Fig. 1に沿って考えてみよう。

(1) SEASのCAT 1「現在の自己の肯定」およびCAT 9「自己志向」、そしてYGのG(一般活動性)の3項は1つのクラスタを形成している。

(2) YGの3因子、Ag(攻撃性)、A(支配性)、S(社会的外向)とSEASのCAT 4「自己主張」が1つのクラスタを形成している。

(3) SEASのCAT 5「卒直な自己表現」は、YGやSEASの他のカテゴリーに類似したものを見出すことはできない。

(4) SEASのCAT 6「両極性の統合」は、YGのR(のんき)との類似性を示している。このCAT 6

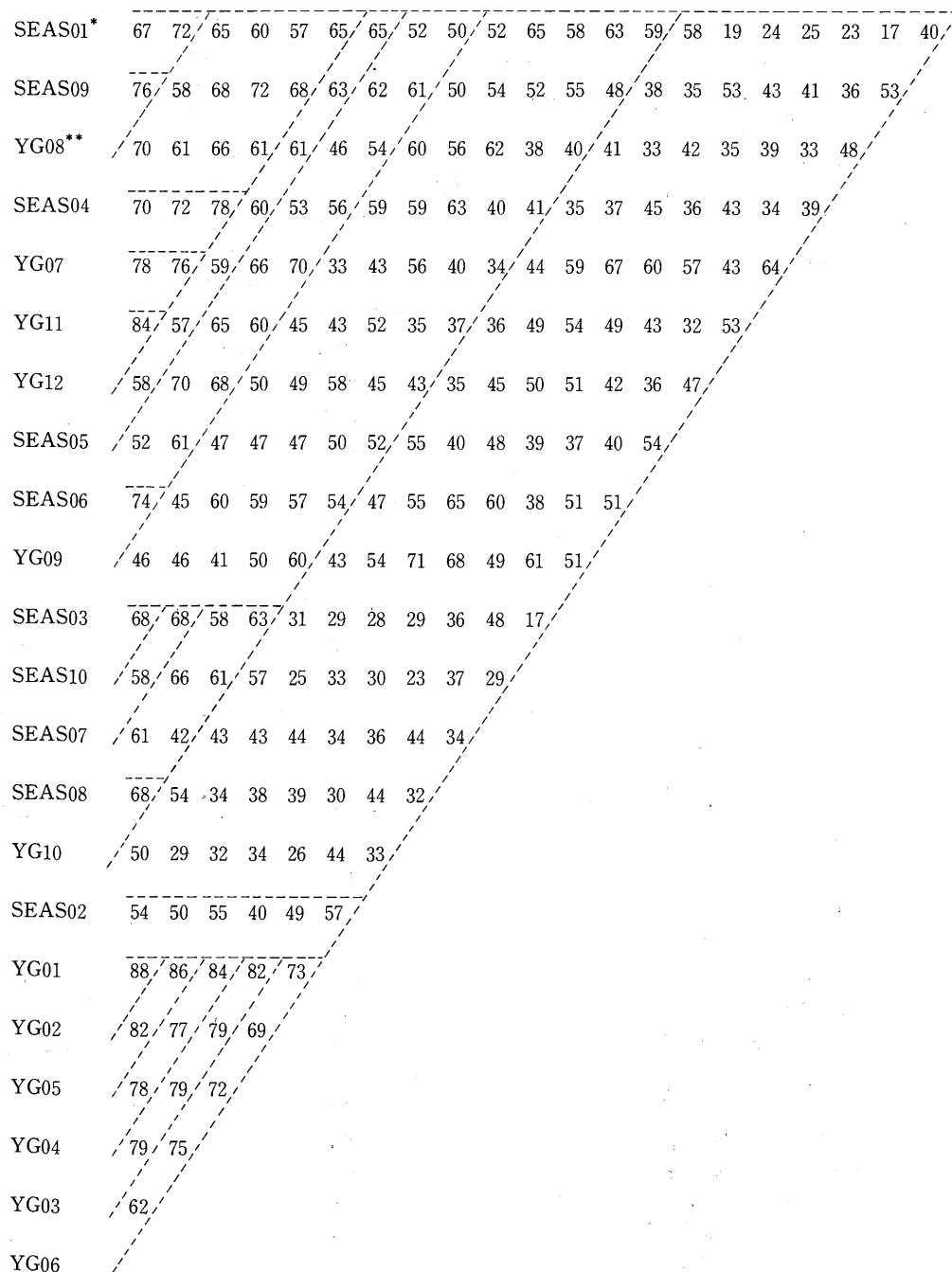


Fig. 1 SEAS カテゴリーとYG因子を変数としたクラスター分析

* SEAS01などの記号は、SEASのカテゴリー番号 (cf. Table 1) を示す。

** YG01などの記号は、YGの因子につけられた番号 (cf. Table 2)を示す。

Table 6

SEAS各カテゴリーとYGの因子との対応
(Fig. 1にもとづく)

SEAS・カテゴリー	YG・因子
1 現在の自己の肯定	G (活動性)
2 達成志向	——
3 積極的に生きる	——
4 自己主張	Ag (攻撃性) A (支配性) S (社会的外向)
5 率直な自己表現	——
6 両極性の統合	R (のんき)
7 独立性	——
8 強 迫	T (思考的外向)
9 自己志向	G (一般活動性)
10 弱点の受容	——

は、村山ら⁹⁾によると、「たてまえの不条理さに対する寛容」と規定されている。またRは、衝動性と非内省性の指標である。この両者の類似性は、概念規定レベルの問題を示唆していると思われる。

(5) SEASのCAT 3「積極的に生きる」は、同CAT 10「弱点の受容」、CAT 7「独立性」との類似を示している。

(6) SEASのCAT 8「強迫」は、YGのT(思考的外向)と類似し、小さなクラスターを形成している。

(7) SEASのCAT 2「達成志向」はYG及びSEASの他のカテゴリーとは高い類似性を示していない。

そして、本節の最初に述べたことであるが、

(8) YGの6因子、D, C, I, N, O, Coは、1つのまとまったクラスターを形成している。

Table 6は、このクラスター分析の結果から示唆されるSEASとYGの関係をまとめたものである。

IV 考 察

あるテストと他のテストの間の比較は、それらのテストの妥当性の検討として位置づけられることが多い。と同時に、そのテストが測定しようとする内容について、概念的なレベルの検討を導いてくれる。

本研究は、SEASをYG性格検査と比較することによって、その各カテゴリーに関する検討を行なうことを主要な目的としていた。相関係数とクラスター分析によるアプローチを試みた結果、幾つかの知見を得ることができた。ここで、YGの因子を手がかりとし

て、SEASの各カテゴリーの持つ意味を考えていこう。

YGの因子間に、多くの有意な相関が見出された。特に、YGのプロファイルの上半分に表示される6因子(D, C, I, N, O, Co)は、そのほとんどが、相互に高く相関していた。また、クラスター分析においても、この6個の因子は、まとまったサブカテゴリーを形成していた。したがって、この6因子は、実際には、1因子的な特性を持っていると考えられる。

これら6因子が、全体として、どのような意味を持っているかは、明らかではない。それらは、「情緒の安定性」に主に関連しているように思われるが、YGのマニュアルなどには、この6因子全体としての意味づけは記されていない。

したがって、SEASのカテゴリーが、YGのこれら6因子との間に高い相関を持っているとしても、その相関の持つ意味を明確化することは難しい。そこで、SEASの各カテゴリーを、これら6因子と有意な相関を持つかどうかによって区分しておいた方がよいように思われる。

以下、(1) YGの全因子と有意な相関を持たない、(2) その6因子とのみ相関している、(3) その6因子に加え他の因子とも相関している、(4) YGのその他の6因子とのみ相関している、の4つの場合に分け、SEASカテゴリーを検討していきたい。

(1) 相関係数、クラスター分析の両方において、YGの因子とは関連していないと思われる幾つかのカテゴリーが見出された。それらは、

- ・CAT 2:「達成志向」
- ・CAT 5:「率直な自己表現」
- ・CAT 7:「独立性」

の3個である。これらは、YGとは異なるパーソナリティの側面を測定していると考えられる。

(2) YGの上記6因子のみと高い相関を示したのは、次の2カテゴリーである。

- ・CAT 3:「積極的に生きる」
- ・CAT 10:「弱点の受容」

この2カテゴリーは、YGが測定している内容(情緒安定性のような)と関連していると考えられる。しかし、クラスター分析の結果は必ずしもそう言えないことを示している。

(3) 上述の6因子の幾つかと、他のYGの因子の両方と相関の高いSEASのカテゴリーは、次の2つである。

- ・CAT 1:「現在の自己の肯定」

・CAT 8 : 「強迫」

CAT 1はG(一般活動性)と、CAT 8はN(思考的外向)と、それぞれ相関しており、クラスター分析も同様の結果を示している。この2個のカテゴリーは、YGが測定している情緒的安定性や社会的適応に関する要因を背景として、GないしTの因子と関係した内容を持っていると考えられる。

(4) YGプロフィールの下半分の因子とのみ関連しているSEASカテゴリーは、次の3個である。

- ・CAT 4 : 「自己主張」
- ・CAT 6 : 「両極性の統合」
- ・CAT 9 : 「自己志向」

その結果は、SEASのこれらのカテゴリーの再解釈に役立つだろう。クラスター分析の結果によると(相関係数のアプローチ以上にYGとの関連が明確化しているように思われる)、「自己主張」は、より攻撃的、社会的な活動を測定していると考えられる。また、それに対して、「自己志向」は、より一般的な活動性の水準を測定しているように思われる。なお、「両極性の統合」は、R(のんき)ないし、S(社会的外向)と関係しており、納得のいく解釈ができそうにない。カテゴリー内容の再検討が必要ではないかと思われる。

YGは、類型論的人格論の立場に立つ、いわば「古いタイプ」のテストである。それに対して、SEASは、人間学的立場から自己実現の程度を測定する、「新しいタイプ」のテストだとされる。しかし、以上に検討したように、YGとSEASは、必ずしも、その測定しようとする内容が、全く異なるテストだとは言えない。もちろん、YGがカバーしていない幾つかの次元をSEASは測定の対象としている。また、YGの判別力が弱いと思われる幾つかのカテゴリーを、SEASは区別的に測定することができるだろう。だが、幾つかの次元については、YGとSEASの測定内容が重複していることが明らかになった。

「自己実現」という概念自体、まだ、あいまいで、明確に定義されていない部分を残している。このようなテスト間関係の分析を通して、自己実現を測定する道具の検討が可能になると同時に、その自己実現概念の精緻化もまた可能となるだろう。

本研究で報告した結果は、かなり限られた母集団に基づいていた。他の母集団、あるいは、他のテストに基づく研究は、SEASの各カテゴリーの明確化、精緻化に役立つだろうと思われる。

要 約

村山ら^{4)~7)}は、自己実現を測定する質問紙SEASを提出した。本報告で、その10個のカテゴリーの持つ意味を明確にする試みを行なった。YG性格検査との関連が検討された。専門学校学生41名に対して両質問紙が実施され、そのデータは、相関係数の算出とクラスター分析によって検討された。

得られた主要な結果は次の通りである。(1) YG性格検査のプロフィールの上半分に示される因子(D, C, I, N, O, Co)の相互に高い相関が見出された。この6因子は、またクラスター分析において、1個のクラスターを形成していた。したがって、これら6因子に対するSEASカテゴリーの関連性については、明確な解釈を行なうことができなかった。(2) SEASカテゴリーの「達成志向」、「卒直な自己表現」、「独立性」は、YGのどの因子とも有意な相関が見出されなかった。(3) 「積極的に生きる」と「弱点の受容」は上記6因子とのみ関係を示した。(4) 「現在の自己の肯定」と「強迫」の2カテゴリーは、上記6因子に加え、YGの一般活動性や思考的外向と、それぞれ高く相関していた。(5) 「自己主張」はYGの3因子、攻撃性、支配性、社会的外向と1つのクラスターを形成していた。「両極性の統合」はのんきさと、「自己志向」は一般活動性と、各々高い相関を示していた。

引用文献

- 1) Korchin, S. J.: *Modern Clinical Psychology*, 1976. 村瀬孝雄(監訳)現代臨床心理学, 弘文堂, 東京, 1980, P 473.
- 2) Maslaow, A.: *Motivation and Personality*, Hapar, New York, 1954.
- 3) 三宅一郎, 中野嘉弘, 水野欽司, 山本嘉一郎: SPSS統計パッケージII 解析編, 東洋経済新報社, 東京, 1977.
- 4) 村山正治, 山田裕章, 峰松 修, 冷川昭子, 二藤部里美, 深尾 誠: 自己実現で測る精神的健康(1), 健康科学, 4, 177-184, 1982.
- 5) 村山正治, 山田裕章, 峰松 修, 冷川 昭子, 亀石圭志, 二藤部里美: 自己実現で測る精神的健康(2)——自己実現尺度の統計的分析——, 健康科学, 5, 1-9, 1983.
- 6) 村山正治, 山田裕章, 峰松 修, 冷川昭子, 亀石圭志: 自己実現で測る精神的健康(3)——項目とフォームの決定——, 健康科学, 6, 45-57, 1984.

- 7) 村山正治, 山田裕章, 峰松 修, 冷川昭子, 亀石圭志: 自己実現で測る精神的健康(4) —— SEASに関する統計資料——, 健康科学, 7, 111-118, 1985.
- 8) Knapp, R.R.: *The Manual of the POI*, EDIS, 1976.
- 9) Shorstrom, E.L.: *An Inventory for the Measurement of Self-Actualization. Educational and Psychological Measurement*, p. 24, 207-218, 1964.
- 10) 山田裕章, 峰松 修, 冷川昭子: 自己実現尺度(SEAS)の試み, 健康科学, 7, 81-90, 1985.